

福成会の
ちよつと素敵な話

「必要な存在」

No. 15



私は福成会に入職して十年以上、就労系の事業所で勤務していました。

勤務していた事業所では、利用者さんは自力や公共交通機関を使って通所し、活動内容はほとんど毎日が作業で、一般企業からの下請け作業や事業所外の清掃などをおこなっていました。

利用者さんとのコミュニケーションは、ほとんどが口頭で、日常会話や作業時の支援など単語や短文で伝える必要はありますが、ある程度はお互いの思いや伝えたいことが伝わっていたと思います。また、利用者さんも自分の気持ちや感情を口頭で伝えることができる方が多くいました。

そんな経験を積んだ私が生活介護に異動したときは十三年目の時でした。

サービス管理責任者として勤務することになり、とても困ったことがありました。

『利用者さんが何をしたいか、どのようなサービスを望んでいるのかが全く分からない…』

異動先の生活介護では、言葉で自分の思いを話せる方はとても少なく、こちらの話し言葉を理解できる方も非常に少ないです。就労系の事業所で培ったサービス管理責任者のスキルが音を立てて崩れていったように感じました。

そんな中で、私が前の事業所でサービス管理責任者として大切にしていたことを思い出しました。

く 利用者の立場に立ち、利用者と同じ目線で、利用者と同じ景色を見るく

当然のことですが、異動したことをきっかけに改めて初心にかえるようにしました。

もちろんすべての利用者さんのことを理解できていないのですが、個別支援計画を通してその人の得意なことやしたいことが分かってきたと思います。

少しずつですが成果が表れました。それが利用者さんの笑顔や「また事業所に来たい」という気持ちにつながっているのですね。うれしく思います。

知的に重度の障害があるからといって、気持ちや感情、思いや意思がないということはありません。その人にとって、少しでも「必要な存在」となれるよう、これからも同じ景色を見て同じ思いを共有していきたいと思っています。